

現代版「宝島芭蕉布」を世界へ——島バナナ繊維を使った特産品開発

本誌編集部

- 団体名…機音の島プロジェクト（はたおと 鹿児島県十島村・宝島）
- 事業名…機音の島プロジェクト

宝島に機音を取り戻したい

鹿児島県十島村（トカラ列島）は、有人七島が南北約一三〇キロメートルにわたり点在する「日本一長い村」である。村営のフェリーとしまが鹿児島港から奄美大島の名瀬港まで、これら島々を結びながら週二便運航している。村ではこの特徴を活かし、各島を順に走破していく「トカラ列島島めぐりマラソン」を開催しており、人気を博している。この有人七島のうち、もともと南に

位置する宝島で、機音の響きを取り戻そうとするのが「機音の島プロジェクト」である。本財団では、平成二七年度から二九年度の三カ年で同プロジェクトに助成している。

ここで織られるものとは、宝島の風景の一部となっている「島バナナ」を利用した新しい芭蕉布（ばしょうふ バナナ布）である。かつて島で織られていた大島紬（おおしまちゅう）と芭蕉布（糸芭蕉）の技術を応用し、産業廃棄物として捨てられる島バナナの茎から抽出した繊維を使った現代版



島内にあるバナナ畑。

「宝島芭蕉布」づくりは、「一般社団法人宝島」のメンバーが中心となって取り組まれている。

法人の設立は平成二七年。このプロ

ジェクトが位置づけられているバナナファイバー事業（島バナナの繊維を利用した新しい特産品の開発、雇用の維持・創出に向けた持続的な産業の形成）に加え、水産加工事業（伝統的なトビウオ漁の再興プロジェクト、「はなみ丸商店」という地魚直売所の運営）が主な柱となっている。

持続可能な現代版芭蕉布づくり

機音の島プロジェクトでは、平成二七年度に奄美大島から大島紬の織り手である南修郎氏を招聘し、島の倉庫に眠っていた手機の再生と島の若い女性を中心とした技術研修を実施した。また技術習得とマーケティングのため、奄美大島への視察も行った。

素材となる島バナナの栽培農家、繊維抽出部隊である島のお父さんたち、そしてかつて島の大島紬の織り手であった前田梅子さん、彼女から技術を継承する移住者の若い女性たち——原料から生産まですべて島内でまかなう態

勢で取り組んでいるのが現代版芭蕉布である。

将来にわたって宝島の芭蕉布が織り続けられること、伝統を尊重しつつ現代的で手に取りやすいデザインであること、をコンセプトにつくられているのが特徴で、二七年度に「かごしまの新特産品コンクール鹿児島県特産品協会理事長賞」を受賞した。これは十島村の過去に例のない快挙である。

生産性の向上が課題

平成二九年二月七日の報告・意見交換会は、芭蕉布の試作品や手機が置かれている工房で開催された。プロジェクトの主要メンバーである本名一竹・祥子さん、竹内功さんをはじめ、小規模多機能ホーム「たから」で働きながら機織りの技術の習得に取り組む国分ひろみさんも駆けつけてくれた。

本名さんの報告によると、二八年度は技術的な土台をつくる期間と位置づ

け、「鉄泉染め」「紡績」「手織り」の三つの技術向上に取り組んだという。

宝島に湧く温泉には鉄分が多く含まれており、空気に触れると急速に酸化し赤茶色に変化する。これを染色に利用したオリジナル商品を生み出そうという試みが「鉄泉染め」である。南講師からも開発の余地が大きいという評価を得て、今後十分に検証していくこととなった。



工房で事業の進捗状況を説明する本名一竹さん。

「紡績」については、関西方面の紡績会社を複数視察し、知識を深め、繊維抽出の精度向上に取り組んだ。現在、宝島は国内トップレベルの技術を持つ紡績会社と提携している。素材が小ロットのため取り合ってもらえない企業が多い中、この会社と提携できたのは、宝島での取り組みが賛同を得られている証しだろう。

現在、「手織り」は、一反を織るのに一〇日を要しているという。現代版芭蕉布づくりは、多くの住民を惹きつける島の産業の一つになりつつあり、当初四人だった織り手が今では七人まで増えている。ただ、商品を安定して供給していくためには、生産スピードを上げ、生産性を高めていく必要があるとのことだった。

出身者と移住者が一堂に会した懇談会

意見交換会終了後、工房前の広場で懇談会が開かれ、会議の出席者に加え

て、機織りの伝承者やその技術を学ぶ移住者、それぞれの生業を持ちながらプロジェクトに関わり、芭蕉紙の製作や繊維抽出に取り組む農家仲間などが集まった。テーブルには手づくりのピザ窯で焼かれた自家製ピザを皮切りに、地魚の燻製や刺身、竹内さんが手のかけた島ラッキョウなど島の食材が並んだ。「村おこしNPO法人 ECOFF」の事業で島に短期滞在し、集落の手伝



自然環境や地域の持続可能性などに配慮した「エシカル・ファッション」に挑戦する試作品の数々。

いや島ラッキョウの植え付け、バナナファイバー・プロジェクトに取り組む大学生も合流。気がつけば広場には大きな輪ができあがっていた。島生まれの前田梅子さんが、ふと宝島の風習や歴史について語り出した時に、竹内さんが一言も聴き逃すまいと、真摯なまなざしを向けていたことが印象的だった。

パリの展示会で宝島芭蕉布を世界にPR

助成の最終年となる今年度は、平成三〇年一月にパリで開催される、鹿児島県の伝統的工芸品を世界へPRする国際展示会への出展という大きな目標がある。

これに向けて、宝島芭蕉布を「エシカル・ファッション」（地球環境への配慮や地域の持続可能性の観点から生産される商品）として位置づけ、付加価値を高めていこうと考えている。そのため専門家を招聘し「機音の島プロジェクト」の

齋藤 潤・離島人材育成基金助成事業運営委員のコメント

■初志を貫徹し、柔軟な発想でさらなる飛躍を

「機音の島プロジェクト」に携わる皆さんと話をしていて印象的だったのは、明確な志が感じられたこと。すなわち、身近な未利用資源を積極的に活用し、持続的な伝統産業を創出して、長期的にその産業が維持される体制をつくりたい、という想いだ。

バナナ繊維というと、繊維採取用の糸芭蕉が知られているが、「機音の島」の発想は違っていた。毎年、バナナの実を収穫した後に廃棄される巨大な茎を利用できないかと考えたのだ。従来の価値観にとらわれずに、新たなモノを開拓していこうという姿勢は、なによりも大切だろう。

また、諸般の事情があり当初予定していた産業化チームの編成より、バナナ繊維の加工法についての技術研修を優先することになった。その結果、バナナ繊維の布をより効率よくつくり、価格を抑制するために、本事業を利用して関西方面で3つの会社を視察し、繊維のアルカリ精練、紡績、機織りの3工程を別々の会社に依頼することができた。こうした柔軟性は、今後も大きな力になるだろう。

時代の先を読み、平成29年度は自然繊維に対する評価が高いヨーロッパに打って出るため、パリの展示会に参加予定だ。エシカル・ファッションに対する意識が進んだヨーロッパで、初志を貫徹しつつバナナ繊維事業にさらなる進展を見せること、そしてより広くバナナ繊維事業の成果を世に知らしめる手法の開発を期待したい。

服飾関係、繊維関係の業界紙、繊維・服飾関係の大学や専門学校などとコラボすることにより、さらに活動範囲が広がる可能性もあるのではないかと。

対外的なブランドイメージを固めるワークショップを開催する予定だ。製品の品質はもちろん、古くから営まれて

きた宝島の機織りの歴史も含めて、新しい伝統産業として資源化していくための事業計画を策定していく。

並行して、織りの技術の向上と島内での手織技術の伝承も継続的に行っていく。今年度からは、参加者を拡大して週一回の技術伝承ワークショップを実施する予定である。

世界の人々の目に、宝島の現代版芭蕉布はどのように映えるのか。パリの展示会では、島の環境、人々の営みや思いを含めた商品の素晴らしさが、来場者にしっかりと伝わるよう万全の態勢で臨んでほしい。

(長谷川)

